2022 4 APR No.403

ARCHITECT

THE JAPAN INSTITUTE OF ARCHITECTS

CONTENTS

地域会だより ―― 1

特別寄稿
名古屋造形大学の設計 ―― 2
山本 理顕

三重発
建築文化講演会2022 ―― 6
「マウントフジの仕事」講師：原田真宏+原田麻魚
多湖 弘樹

保存情報　第244回
データ発掘：東山植物園 温室前館 ―― 7
谷村 茂

編集後記 ―― 7
原 眞佐実・中澤 賢一

愛知発
建築ワークショップ ―― 8
笹野 直之・黒野 有一郎・上原 徹也・金山 美登利・渡邉 須美樹

地域会だより 今後の予定

■JIA静岡地域会
- 4/7　2021年度監査の開催
- 4/14　静岡地域会役員会の開催（WEB併用）
- 4/26　静岡地域会役員会総会の開催（WEB併用）

■JIA愛知地域会
- 4/1　第10回役員会（WEB併用）
- 4/15　第11回役員会（WEB併用）

■JIA岐阜地域会
- 4/19　岐阜地域会通常総会

■JIA三重地域会
- 4/13　・会計監査
  ・第1回役員会
  三重県総合文化センター（WEB併用）
- 4/27　・2022年度三重地域会通常総会
  三重県総合文化センター（WEB併用）

Bulletin Board

審 査 会

第 27 回 JIA 東海学生卒業設計コンクール 2022

二次審査会

2022. 05. 28（sat）

13:00 - 18:00

オンライン配信
二次審査会はオンライン配信致します。
YouTube の URL をJIA東海支部ホームページ上に公開します。
JIA東海支部 URL：http://www.jia-tokai.org　QRコード：

審査会スケジュール

応募期間	2022 年 4 月 20 日～4 月 30 日	
一次審査	2022 年 5 月初旬予定	：非公開（10 作品程度選定）
選定作品発表	2022 年 5 月初旬予定	：JIA 東海支部ホームページ上に公開
	（一次審査通過者には事前にメール連絡を致します。）	
二次審査・表彰式	2022 年 5 月 28 日 13:00 - 18:00	：オンライン公開
	（金賞、銀賞、銅賞 等 作品選定）	

金賞、銀賞、銅賞 等 5 点を JIA 全国卒業設計コンクールへ推薦致します。

審査員長 若林 亮　審査員 浅井裕雄　審査員 宇佐見 寛　審査員 金山美登利　審査員 渡辺 隆

主催：公益社団法人日本建築家協会東海支部
後援：公益社団法人愛知建築士会、公益社団法人愛知県建築士事務所協会、一般社団法人日本建築学会東海支部

表紙 街で見かけた風景 ①「かくれた次元」

小学生の頃、授業中にうわの空で空想の世界に没入し、みんなと違う答えを書いてしまい焦ったものです。いつもの街でも、初めての街でも「かくれた次元」に入り込めば普段と違ったものが見えてきます。写真は奈良の元興寺を訪れたとき見つけたビニールシートを被った朽ち果てたお堂と「文化財を大切に」の碑。

「かくれた次元」エドワード・T・ホール　1980年　みすず書房

吉元 学（JIA愛知）
ワーク○キューブ／愛知淑徳大学

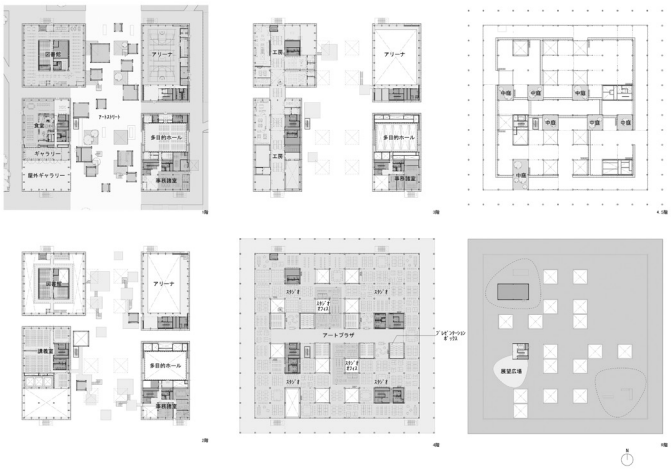
‖特別寄稿‖ 建築家 山本 理顕

名古屋造形大学の設計

外観夜景（写真／© Riken Yamamoto & Field Shop）

名古屋造形大学は新校舎計画を機に今まで九つのコースに分けられていた研究領域を五つの領域に統廃合することになった。

従来までの日本画、洋画、彫刻、グラフィック・デザイン、プロダクト・デザイン、建築、インテリア、マンガ、イラストレーション、CGなどの、スキルや素材や用途や商品分類によってコース分けをするではなくて、美術制作とは何か、デザイン活動とは何のために、そして誰のための活動なのか、誰のための表現なのか、その原点に立って再構成されたのである。



美術コース	美術表現領域	□
建築・インテリアデザインコース	地域社会圏領域	○
マンガコース	映像文学領域	△
アニメーション・CGコース		
イラストレーションデザインコース		
グラフィックデザインコース	空間作法領域	＋
ライフデザインコース		
ジュエリーデザインコース		
メディアデザインコース	情報表現領域	＝

○＝△＋□
名古屋造形大学
NAGOYA ZOKEI UNIVERSITY

①美術表現領域 - Art Expression

従来までの、油画、日本画、彫刻、コンテンポラリーというコースに分けるという考え方は、それぞれのコースの純粋性・自立性を保つためには有効だが、その相互の関係を構築するためにはむしろ弊害になっている。それぞれを美術領域という一つの研究領域に統合した上で、それぞれの研究者が相互に関わり合いを持つことのできる環境を目指す。美術表現はその受けとり手との関係である。単に自己の内面の探求のための芸術活動ではなく、誰のために何を表現するのか、それを探求するのが、美術表現領域である。

②映像文学領域 - Visual Literature

すぐれた文学作品の情景描写は、その情景の中にいる登場人物の内面をも描写する。読者はその情景を頭に描き、それだけで登場人物の心の動きを想像することができる。

一方でマンガ作品という表現形式はその情景を画像として描写する。すぐれたマンガ作品においては、活字による説明がなくても読者はその登場人物の心の動きを推し量ることができる。こうした画像作品の作品性は二十世紀の日本で一つの高みに達したと思われる。それは映画、アニメーション・CG、イラストレーションなどの映像表現形式、さらには文学作品に対しても強い影響を与え、あるいは文学作品から強い影響を受けている。その相互関係を含んで映像文学という新たな研究領域として立ちあげる。

③地域社会圏領域 - Community Area Design

建築コース/インテリア・デザインコースという考え方は建築空間をあまりにも狭い研究領域に閉じ込めてしまっている。建築空間とは「それ自身であると同時に周辺地域社会との関係である」。建築と周辺環境・地域社会との関係を強く意識した研究活動を目指す。それは同時に地域社会圏の再構築を目指す活動である。都市環境のためのサイン・デザイン(グラフィック・デザイン)、あるいは地域社会に固有の交通システム(プロダクト・デザイン)のような研究活動がこの地域社会圏領域から新たに創造されることを目指す。

④空間作法領域 - Community Sense Design

私たちの日常の様々な身体行為は、ただ自己の意志のみに従って行われているわけではない。他者に対する気配りと共にその行為を行っているのである。一つの空間の中において、他者に対する気配りと共にある身体行為は「作法」と呼ばれる。身体行為と共にある物のデザインとは、グラフィック・デザイン、プロダクト・デザインやインテリア・デザイン、ファッション・デザイン、ジュエリー・デザイン、あるいはカトラリー・デザイン等である。そうしたデザインをただ機能に基づくデザインと考えるのではなく、他者と共に居る空間の中で他者への気配りとして考える、それが空間作法という考え方である。

⑤情報表現領域 - Representation Design

数値化された情報を、単にそれを数値として処理するのではなくて、視覚情報として表現されることによって発信者と受け手との関係は劇的に変わる。その視覚化された情報は共同体的に共有された情報になるからである。共同体の記憶として共有される、その共有された記憶のことを表象(representation)という。情報表現領域はその表象の役割について探求する研究領域である。

オープン・スタジオ(写真/© Riken Yamamoto & Field Shop)

各領域相互の関係

それぞれの領域は相互に関係する。「美術表現領域」は「映像文学領域」と深く関係している。「地域社会圏領域」と「空間作法領域」あるいは「情報表現領域」もまた深く関わっている。空間作法の美学、あるいは情報表現の美学が成り立つためにはその作法の舞台である「地域社会圏」が予め存在していることが前提なのである。五つの領域相互の関係こそが、名古屋造形大学の新たな芸術活動をつくりだすのである。

大学の設計と前後して学長就任を依頼された。つまり大学建築の提案がそのまま大学改革なのだ。それを期待されたのである。

五つの領域への再編は、その中から生まれてきた。五つの領域相互の関係をつくるために、88メートル×88メートル、天井高7.5メートルという巨大な空間を提案した。スタジオである。ワンルームの空間である。研究室のような閉じた空間はない。学生たちも先生たちも混ざり合って自由にこの空間で活動してもらうためである。

格子壁は耐震要素である。頑丈な壁が耐震要素になるのが従来までの方法なのだが、名古屋造形大学では、光を通す壁であると同時にそれが耐震壁になるという離れ業を実現させた。1階から3階までの外壁がこの格子壁である。格子壁を通じて外部からの光が差し込む。刻々と変化する室内環境。

名古屋造形大学は地下鉄名城線の名城公園駅を跨ぐように配置されている。巨大な橋桁のような建築なのである。その橋桁の下が「アートストリート」である。「アートストリート」には「見世」と呼んでいる小さな建築が並んでいる。文字通り「お見世」なのである。大学の先生、学生がつくる作品をここに展示し、そして販売する場所である。名古屋造形大学から、新商品が生まれることを期待する。

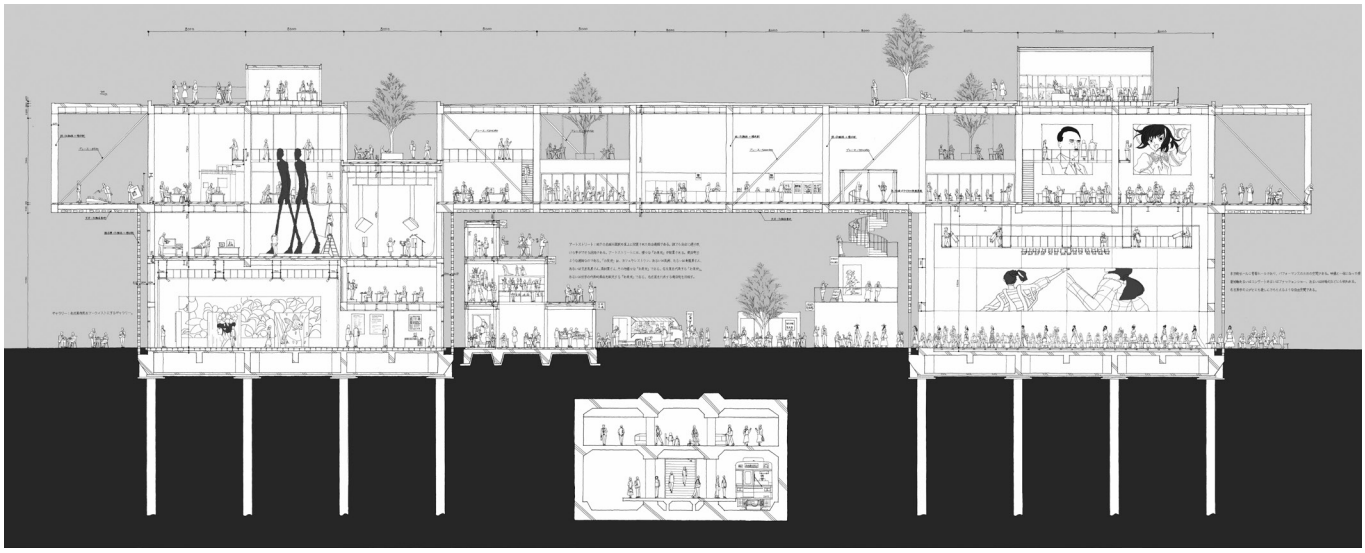
五つの領域はそれぞれにロゴサインを持つ。五つのロゴサインは、最も単純な形態から選ばれた。五つのロゴは単にその差異が認識できれば良い。その差異を明確にするために選ばれた形態である。スタジオサインとして使われることを念頭に置いてそのデザインが決められた。

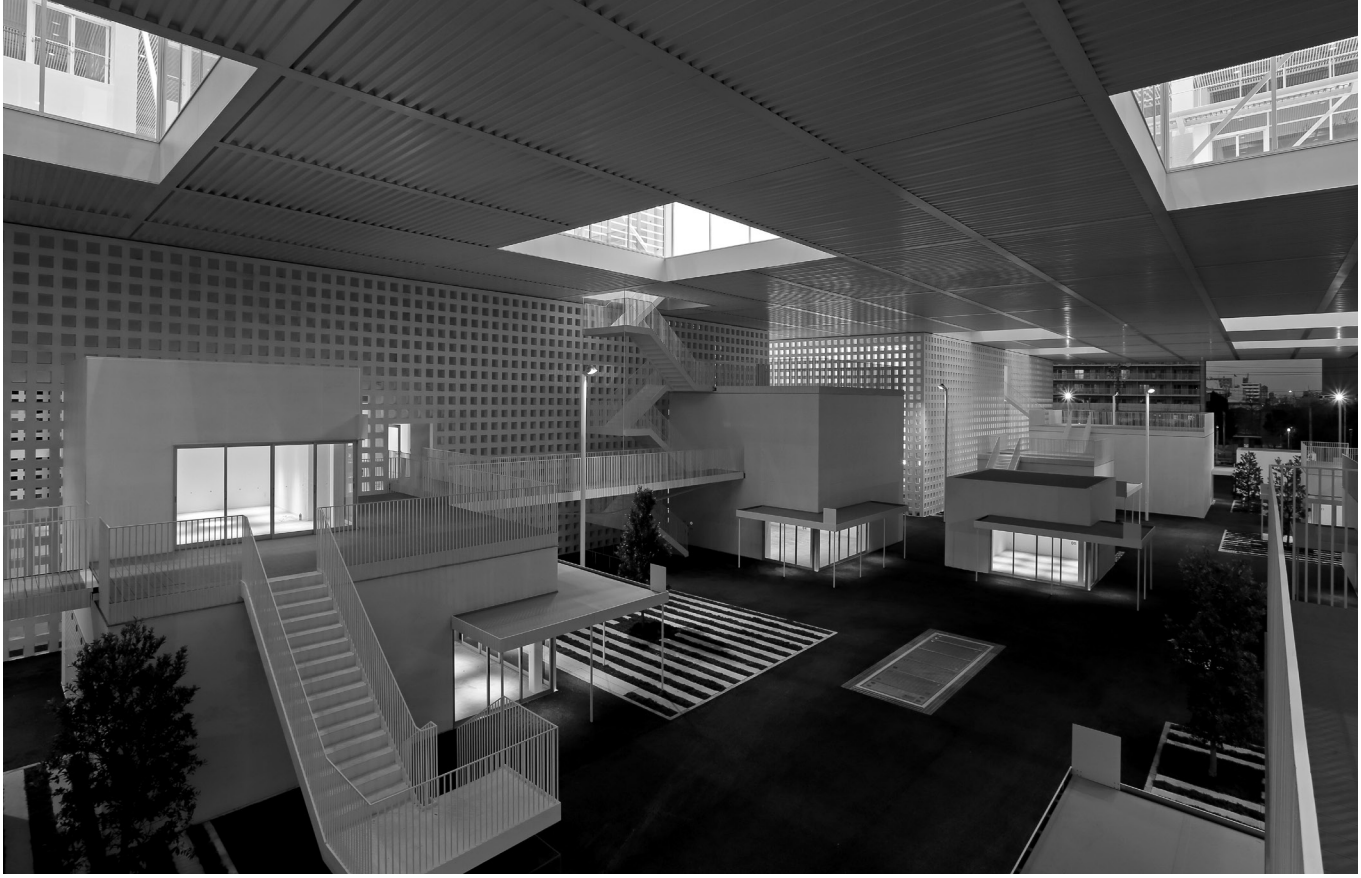
大学は教授会によって運営される。「教授会自治」はなによりも大切にされなければならない、大学運営の中核である。大学のすべての場所、すべての施設の運営は教授会の決定に任される。運営には学生も参加する。

名古屋造形大学
NAGOYA ZOKEI UNIVERSITY

山本 理顕
建築家

（写真／©HIDEO MORI）

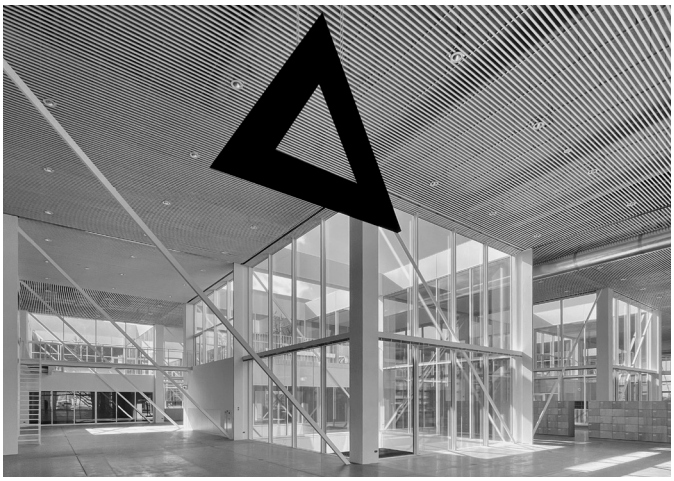




アートストリート（写真／© 大野 繁）

屋外階段（写真／© 大野 繁）

アートプラザ（写真／© 大野 繁）



スタジオ（写真／© Riken Yamamoto & Field Shop）

オープン・ギャラリー（写真／© Riken Yamamoto & Field Shop）

建築文化講演会2022
「マウントフジの仕事」講師:原田真宏＋原田麻魚

原田 真宏 氏

2022年1月22日、三重県津市のアストプラザ内にあるアストホールにて建築文化講演会が開催されました。今回は原田真宏氏にお越しいただき、「マウントフジの仕事」としてご講演していただきました。原田麻魚氏はご家族の体調が思わしくないとのことで欠席され、真宏氏の単独講演となりました。津市では1月21日より「まん延防止等重点措置」が適用され、定員数を削減し、イベント開催ルールを遵守しての開催となりました。コロナ禍という状況の中、どれくらい集まるのか少し不安でしたが、学生も多く、たくさんの方にご来場いただきました。

講演は登山の話から始まりました。毎年開催されるイベントで社内全員参加とのことでした。たとえ徹夜明けであったとしても必ず行うとのことで、そこまでして登山をする理由は、自然の合理性を共有し、そこから建築の手がかり、きっかけのようなものを持ってほしいからということでした。これは、都市部で活動していると建築を考えるときの背景が社会問題になりがちになることが多く、もっと自然の合理的な部分にも目を向けてほしいという原田氏のメッセージということでした。私も大学生の時に取り組んだ卒業設計のことを思い返すと、当時、住んでいた地域の社会的な問題をテーマとしていたので、図星を指されました。

設計初期の作品から順番に紹介していただきましたが、最初の作品から印象深いものでした。「XXXX/焼津の陶芸小屋」では、施主から車を買うのを止めるから、その分のお金でアトリエを作ってほしい、そういうところからこのプロジェクトがスタートしました。予算が約150万とのことで、真宏氏はその予算の低さに魅力を感じたとのことでした。材料の値段を綿密にチェックし、構造の考え方も在来工法や一般的なものではなく、構造用合板を文字通りXの形に配置することでトラスを形成し、それが構造の主たるものとして形成されると考え、このアトリエが建てられました。従来の考え方に捉われず、新たなものを造る発明家ような印象を受けました。

学童保育とコミュニティセンターの複合施設「知立の寺子屋」では、屋根の形が懸垂曲線になっており、まさに「自然の合理性」が建物の形に表れていました。また、敷地近辺にある神社や寺院は平入りの低い屋根の門、その先には境内、そしてその奥には大きな平入りの本堂という構成からなっているということで、知立の寺子屋もその空間構成に倣うように、エントランスにはカフェと職員室を低い平入りの空間とし、そこを抜けるとホールがあり、その奥には複数の教室からなる大きな平入りの空間で構成されています。旧東海道沿いから見る低い平入りの歴史的なファサードと公園から見る懸垂曲線の自然科学的なファサードの対比が凄く興味深く感じられました。

2020年日本建築学会賞を受賞された「道の駅ましこ」では屋根の勾配を周囲の山並みと揃えられており、それが連なることで山並みそのものがそこにあるような印象を受けました。その屋根を支える躯体は地元の土を用いた左官仕上となっています。屋根勾配の決定の方法や壁体の材料の選定についても自然の一部を取り入れた、ある意味、「自然の合理性」が関係しているのでは思いました。また、妻面は基本的に見付の小さいスチールサッシになっており、真宏氏が「風景でつくり、風景をつくる建築」と述べられていたのも、合点がいきました。

他にもたくさん作品を紹介していただきましたが、真宏氏は構造のことについても細かく触れながら講演されていました(XXXXのトラスの考え方、知立の寺子屋の懸垂曲線の屋根の苦労した点、道の駅ましこの勾配屋根・スチールサッシの納まり等)。設計する上でコンセプトやストーリーを考えるのは大切ですが、それを実現するためにどういう構造にしたらいいのか、そこを噛み砕きながら、設計者はもちろんですが、学生にも向けてそういうメッセージを強く発信されていたのかなという印象を受けました。

講演の中で引用されていたゲーテ氏の「市民の要求を適える『第二の自然』」が良い建築であるという考えを真宏氏が考える建築の理想だとされていました。この講演を通して「自然の合理性」に気付くことは「第二の自然」を創造する一つの大事な要素なのだなと思いました。

多湖 弘樹（JIA三重）
日新設計

お気に入りの歴史的環境調査 データ発掘

東山植物園 温室前館（ひがしやましょくぶつえん おんしつぜんかん）

名古屋市東山植物園温室前館は、昭和11年（1936）に東山植物園の開園に合わせて建設され、平成18年（2006）に「国・重要文化財」に指定された。

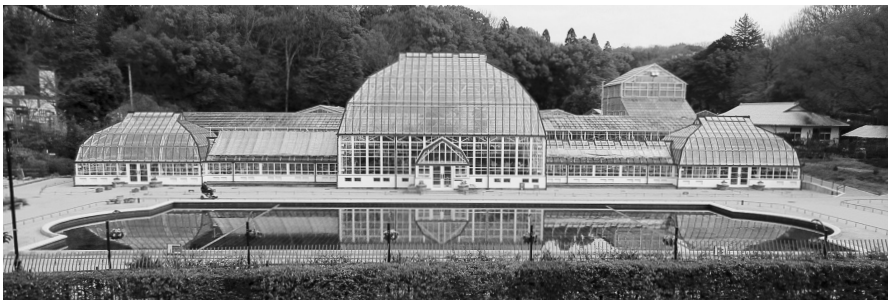
その後保存修理の為、平成25年2月から令和3年4月23日のリニューアルオープンまで閉鎖されていた。

温室は南側の前館と奥の後館に大きく分かれていて、開館当時の前館は鉄骨造、後館は木造だったらしいが、現在はすべて鉄骨造で、透明ガラスでおおわれている。前館の最高高さは12.4m、全長66mで温室前館面積は約596㎡という。

有名な「The Crystal Palace（London）」はこの温室を遡ること約80年前の1851年に第1回万国博覧会のメイン会場として建設されていて当時の人々を驚かせているが、東山植物園温室も十分見ごたえがある構造物だ。完成した当時は「東洋一の水晶宮」と言われたのもうなずける。両者を比較すると、前者の屋根部分はヴォールト状に曲げたH鋼（リブ）をブレースで固定しているのに対し、後者の屋根部分は直線に近いか、軽く曲げたL型材を全溶接してトラス柱とし、L型梁材を細かく溶接でとめているようで、角張ってみえる。温室内には当時の切り取られた鉄骨も展示しているので湿潤な環境での鉄骨への負荷がわかる。

後館鉄骨（撮影:2022年3月3日）

前館鉄骨（撮影:2022年3月3日）



前景（撮影:2022年3月3日）

【概　要】

所　在　地：名古屋市千種区田代町瓶杁1番地41
建　設　年：昭和11年（1936）
　＊資料によっては建設年1937年とある。
設　計　者：一圓俊郎
所　有　者：名古屋市
建物概要：建築面積595.98㎡
　長さ（東西）66.46m・高さ12.42m
重文指定年月日：2006年12月19日
問い合わせ先：東山動植物園 TEL.052-782-2111
アクセス：名古屋市営地下鉄東山線東山公園下車3分
参考資料：「東洋一の水晶宮再び」パンフレット
　国指定文化財等データベース（文化庁）
　The Illustrated London News v.17
　（1850.11.16）Reprint（1997）

谷村　茂（JIA 愛知）
アール・アンド・エス 設計工房

編集後記

●つい先日、名城公園近くを通る機会があった折に白い建物を目にした。これが今月号に掲載された「名古屋造形大学」の移転新校舎だった。遠目からの眺めにちょっとしたトキメキを感じたので、何の建物だろうかと思っていたが、山本理顕氏設計の学舎だった。最近の大学は一時の郊外型から都会型に変化してきているので「名古屋造形大学」もその一環として、利便性と良い環境を求めての移転プロジェクトかと。山本氏が同大学の学長に就任したという報を聞いたときには、名古屋の大学も面白くなるかなと微かな期待を抱いたのを覚えているが、あれから、4年という歳月が流れたのだと再認識させられたのが系列大学の移転問題だ。これもつい先日、閉鎖移転になると話題になったばかりの場所のプロジェクトである。名古屋造形大学の新学舎が山本氏の置き土産になるとすれば非常に残念でならないが、新しい考え方の教育で育つ学生たちに一縷の希望を抱いて見守ってみたい気がする。またまた、編集後記のタブロイド版的なことを書いてしまった。

（原　眞佐実）

●コロナ禍以降、支部活動もリモートでの開催が大半となり、WEB上に映し出された画像を中心に誌面が構成されていましたが、今号は久々に対面での事業報告で誌面が構成されました。コロナ禍でWEB利用による新たな可能性も広がりましたが、やはり実空間を介する活動の意義を感じるとともに、参加者が集った写真に安心感を覚えたのは私だけでしょうか。この、「人」を中心に「場」を写した事業報告とは対照的に、山本理顕氏の特別寄稿では建築の美しさを最大限に写した写真と清冽な文章に背筋が伸び、我々の活動の源流である建築設計の意義と楽しさを再認識できる誌面となっています。さらに今号から吉元学さんによる表紙連載が始まりました。これまた山本氏の記事とは対照的に、期せずして垣間見える街の魅力が紹介されており、次回以降の内容が大変楽しみです。

（中澤 賢一）

ARCHITECT
第403号
発行日　2022.4.1　（毎月1回発行）
定　価　380円（税込み）
発行責任者　水野豊秋
編集責任者　川本直義
編　集　東海支部会報委員会
　愛知地域会ブリテン委員会
　株式会社イヅミ内
　ARCHITECT 編集部
　岡崎市明大寺町荒井10番地
　TEL（0564）21-2657　FAX 26-1792
発行所　（公社）日本建築家協会東海支部
　名古屋市中区栄 4-3-26　昭和ビル
　TEL（052）263-4636　FAX 251-8495
　E-Mail：shibu@jia-tokai.org
　http：//www.jia-tokai.org/

「一寸格子」建築ワークショップ

新型コロナウィルスまん延のこの2年間は、これまで様々に拡がった企画やイベントのほとんどが実施できない苦悩の時間となりました。ただ、1年経って、2年目の今年度は、小学校や県図書館の開催への強い意志に押され、この状況が少し動き出した印象です。

愛知県図書館からのお声掛けは、今後の行政（県）との連携の良いきっかけとなりそうな予感。また、猪高小学校の建築教室ではコロナ禍の間隙を縫っての奇跡的な開催となりました。「一寸格子」による取り組みは、今後も拡がりをみせることでしょう。

黒野 有一郎（JIA愛知）
一級建築士事務所 建築クロノ

２年ぶりの開催となった猪高小の建築教室。今年度の試みとしては、高さ方向の規制を1.8mから3.6mにしたことで、表現の自由度に広がりが出ました。また、グループ学習のしやすさという観点から班の人数を減らし、班を増やしました。その結果、よりたくさんの作品が並ぶことで、「まちなみ」と言っても過言でないものができあがりました。

毎回感じることではありますが、子どもたちが目を輝かせてこの授業に取り組んでくれる姿を見ることによって、私たち大人は、沢山の活力をもらっているように思います。

笹野 直之（JIA愛知）
笹野空間設計

愛知県図書館＋JIA愛知 2021年11月27日

開館30周年を迎えた愛知県図書館と建築ワークショップを共催したきっかけは、県議会議員の岡明彦氏からのご紹介でした。「建築家＋vol.2（特集：子どもと建築）」をお渡ししたところ、一寸格子のワークショップに大変興味を持っていただきました。県図書館では蔵書重点分野である「ものづくり」のイベントを企画検討していた時期で、一寸格子ワークショップを多方面に広げていきたいJIA愛知と目的がうまく合致しました。公共施設で開かれるコロナ禍でのイベント事業ということもあり、準備段階より不安もありましたが、幸いにも緊急事態宣言等の措置もなく2021年11月27日に開催するに至りました。

従来の小学校でのワークショップとは違い、参加者は県内から応募された親子ペア（10組21名）となります。建築・ものづくり分野に対して意識を高く持たれている様子で、導入レクチャー「建築家のしごと」では街や建築物のスライド写真にも興味を示されていました。懸念される点として、初顔合わせメンバーによるグループワークであること。そして3時間以内にレクチャーから模型ワーク、一寸格子完成、講評、片付けまでを完了させなければなりませんでしたが、参加者のみなさまが積極的に取り組んでいただいたおかげで円滑に進行することができました。

これまでの一寸格子ワークショップでは、完

猪高小＋JIA愛知 2022年1月12日・31日

昨年度はコロナの影響により中止を余儀なくされましたが、本年度は蔓延防止重点措置期間でありながらも学校関係者が積極的に準備対応してくださり、2022年１月12日導入レクチャー、1月31日実物大製作ワークショップが無事に開催されました。例年通り５年生を対象とし、3クラス各5チームの計15チームによるコンペティション形式です。「強・用・美」を軸に金賞・銀賞・銅賞等の授与をすることでモチベーションの向上、製作意図を明確にしながら取り組んでもらうねらいがあります。昼休みを利用した全校児童の作品体験を通じ、猪高小学校の児童たちに一寸格子ワークショップが浸透していること、モノづくりの楽しさの気づきの場になっていることを感じます。

実物大製作時に多くの大人のサポートを必要とすることからJIA会員に加え、学生、PTAの皆様にご協力いただいております。本年度からJSCA木質系部会の方々にもご協力頂きました。

「強」の部分で専門家にご協力いただけたらさらにグレードアップし、より安全に開催するサポートになればと期待し、ご協力頂きました。また、次回以降において構造体の多様性を児童から引き出す際にレクチャーの段階で示唆していく内容についてもアドバイス頂けることを期待しています。多くの方に参加、ご協力頂きありがとうございました。

金山 美登利
（JIA愛知・JSCA中部木質系部会）
モヴ構造設計株式会社

学生スタッフ コメント

●小学生の発想力に驚かされました。私のチームでは模型に沿って造っていくうちに上手くいかない点が出てきてしまい、計画を変更するといったことがありました。そんな中でも児童同士で声を掛け合い、最後には大きな作品を無事完成できたことが印象的でした。

名城大学 都市情報学部 2年生
牛田 真登（うしだ まなと）

●私がワークショップの中で印象的であったのが、子どもたちの物づくりへの積極的な姿でした。線の要素である木材が組み合わって面が作られ、面を組み合わせることで立体が作られていく中で、子どもたちがうれしそうな表情になっていくのを見て、私自身も建築の本質的な魅力を再確認することとなりました。

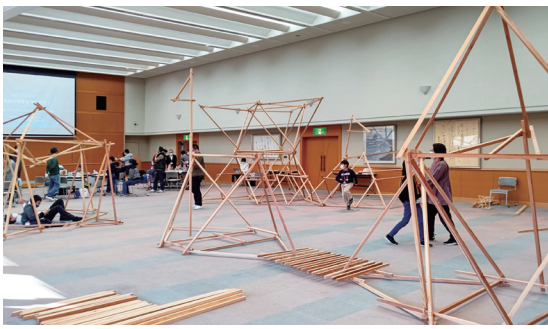
子どもたちの自由な発想に感心する部分も多く、物づくりへの純粋な気持ちを忘れず建築設計に携わっていきたいと感じました。

豊橋技術科学大学 大学院1年 建築・都市システム学専攻
佐藤 玄太（さとう げんた）

成高さをロング（1.82m）＋ショート（0.91m）＝2.73mまでとしていました。会場となった県図書館会議室は天井高が6mほどあり、参加児童に対しても安全面について十分配慮できることから、今回はロング（1.82m）＋ロング（1.82m）＝3.64mへと高さルールを緩和しました。保護者との親子型参加ということも相まって、完成した作品のひとつはダイナミックなデザインとなりました。このことが1月の猪高小建築教室（下段記事）へのルール変更へとつながっていきます。

新型コロナウイルスの影響により、JIA愛知の一寸格子ワークショップは久々の開催となりました。この機会が愛知県図書館との共催コラボ企画であったことは大きな収穫でありました。ご協力いただきました会員建築家のお力添えには心より感謝いたします。

また、冒頭にも記しましたとおり「建築家＋vol.2」という冊子媒体が、新たな展開での活動につながりました。現在進めている「建築家＋vol.3」製作もさらなる発展につながると思えば強い励みとなります。



上原 徹也（JIA愛知）
ファンズマイル／上原設計

初めて一寸格子に参加しました。JIAメンバーから「子供たちの自由な発想とイメージを実現するために構造的なサポートを」と聞き参加しました。

小学生の就きたい職業で最近はスポーツ選手がトップになっていますが以前は「大工さん」も上位にランキングされていました。建築に携わる者としては少し寂しい気がします。

私も小学生頃は父親が日曜大工をしており車庫の屋根や勉強部屋を作っていくところを身近に見ていました。最近は子供達がそういった体験をする機会が少なくなり大工さんや建設屋を志す子供が少なくなってきているように感じています。そんな中、今回の一寸格子は正にそうゆう体験を簡単に安全に体験できるプログラムであると感心しています。

JIAメンバーの「建築家希望者が少なくなった」と言う危機意識が行動を起こさせ学校、PTAを巻き込み先生、お父さんお母さんと子供たちが一緒に体験する。

私達JSCAのメンバーは一応「構造技術者」ですので結構気合を入れてワークショップに臨みました。しかし、子供たちは感覚で力の流れを理解し軸力だとか曲げモーメントだとか私たちが日頃格闘している事が如何に馬鹿げているか教えてもらう事もでき本当に貴重な体験でした。ありがとうございました。

渡邉 須美樹
（JSCA中部 木質系部会）
株式会社木構堂

●生徒たちに、ものつくりや構造の基本的な知識を楽しい方法で学んでもらうことが素晴らしいと思いました。これによって、建築に関心を持ってくる子どもたちも増えて、実際に建築の仕事に就かなくても、よりクリエイティブなところが成長したと思います。

子供たちの自由な考え方や自信をもって発表する姿をみて、実際に大学で学んでいく中でも自分の自由でオリジナルなアイデアをもつことが大事だと思いました。建築の楽しさを伝えるためにモンゴルでもこういうワークショップを開催したいです。

豊橋技術科学大学 建築・都市システム学課程 4年
Buyan-Oldokh Nandin-Erdene（ブヤンオルドフ ナンディンエルデネ）
～モンゴルからの留学生～